

高校社会の取り出し授業、1年生「歴史総合」初年度の挑戦 —日本語・歴史の知識、どちらも少ない生徒たちの学びのための方策—

小川 郁子 (公立高校講師)

1. 2022年度の取り組みの概要紹介

1.1. 実践の場の状況

筆者の勤務校は、公立昼夜間定時制高校である。1年生のうち、15人が国語・社会の「取り出しクラス」で学んでいる。報告するのは、筆者が講師として担当する新学習指導要領の新科目「歴史総合」（必履修、週1回2時間続き）の年間授業である。1年生3クラス8人の生徒の出身国はフィリピン、中国、ネパール、パナマ、エチオピアで、入学時で滞日半年～3年だが、コロナ禍で日本語学習の機会が不十分だったせいか、日本語力が低かった。

1.2. 「取り出し社会科」の基本対応

社会科の「取り出しクラス」の授業は、今までも次の9点を配慮してきた。①言語的・時間的制約から、中学校社会科の知識・思考課題を到達目標にする。②授業はやさしい日本語で行う。③可能な限り視覚情報を活用する。④既有知識を活用する。⑤授業用ワークシートはルビを振り、難しい語彙には英語訳/中国語訳を加える。⑥同じ言語を使って話し合いがしやすい座席配置。⑦母語力とスマホの翻訳・検索機能を活用。⑧定期考査は問題文と解答を、やさしい日本語・英語・中国語で対応する。⑨学習の基本語彙は漢字の読みを習得する。

1.3. 「歴史総合」で取り入れた新しい試み

「歴史総合」は上記の配慮だけでは生徒の現状に対応できないと考え、新しい試みを行い、その中から3つ取り上げる。

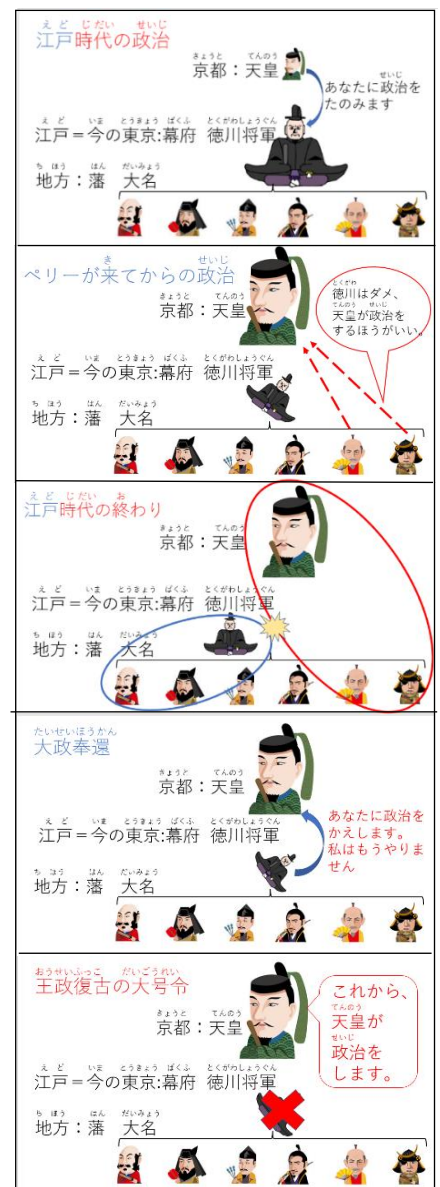
生徒たちは、中学校の時の歴史の授業は理解できず、母国で世界史を学んでいないし、日本史は全く知らない。①日本史を負担なく学ぶ試み、②既有知識の不足を補完する試み。

「歴史総合」は、近現代の世界と日本を包括的にとらえ、歴史を「考える」ことを主眼とする科目である¹⁾。③「考える」学びのための工夫。この3つの新たな試みを紹介する。

2. 実践事例紹介

2.1. 有効だった試み：言語に依存しない図解資料

日本史の幕末史は、何をどの程度取り上げどう説明できるか、ずっと悩んでいた。政治体制の転換は写真だけでは伝えられない。そこで「見るだけでわかる図解パワポ」（右の5枚）を作成して、ごく簡単に明治につないだ。概念理解の助けになったと感じられた。終了したフランス革命の単元は、説明に手間取ったが、生徒が理解できた感触が得られなかった。この「図解パワポ」の手法を今後は他の単元でも作ってみて、うまく理解につながるか試みたい。



2.2. 方向はいいはずだが、条件が整わなかった試み：得意言語の予習課題を使った反転授業

教科書は江戸時代から始まる。既有知識の不足を共通に補うために、多言語版「こんにちは日本の歴史」²⁾と「予習プリント」(基本問題 10 問)に取り組んだ。その後世界史部分は旧版中学校歴史教科書にルビを振り、その英語/中国語訳を読み教材にした。

同じ試みを2年「世界史A」の5人も行い、中国人生徒4人は課題を簡単にこなした。授業中の問いかけに即座に答え「よく気づいたね」と褒めると「予習プリントでやったよ」と答えた。後半になると、3人がルビ付き日本語版だけで解答した。毎回提出して予習が定着し、日本語の読み取り能力も向上した。

		番号	0	1	2	3	4	5	6	7	8				
歴史総合	母語	内容	10	10	10	10	11	5	10	10	10				
	1 タガ	8 英	4	3	0	1	9								
	2 タガ	7 英													
	3 タガ	6 英	10	8	8	3	1	4	7	6					
	4 スベ	9 英													
	5 アム	9 英	9	7	10						2				
	6 ネバ	7 英	10	4	3	0	3	5							
	7 中国	6 中	10			4	0	4	1	3	2				
	8 中国	7 中	10	10	8	-	-	欠	席	-	-				
			1	4	2	3			5	6	7	8	9	10	11
世界史A	母語	内容	10	10		11	5		10	10	10	10	10	10	10
	1 中国	5 中		8	10		6	5		10	10	10	6	10	10
	2 中国	9 中		10	9		11	5		10	10	10	6	10	10
	3 中国	9 中		10	10		11	5		10	10	10	6	10	10
	4 中国	8 中		10	10		10	5		10	7	10	6	10	9
	5 ネバ	9 英		7	3		3			5	4	5	2	6	8

母語による反転学習は効果を確認できた。

しかし、反転学習が生命線の1年生は、効果がなかった。真面目に取り組んだのは生徒の半分で、正解率が低い。簡単に「答え＝ほぼ重要語句」が探し出せるように作成したが、正解できない。毎回提出したフィリピンの生徒は、「英語が難しくて内容がわからない」と言っていた。

英語訳を英語科の教員に判断してもらったところ「上位校なら難なく読める」とのことだった。英語が母語の生徒はいない。母国では英語が授業言語で、母国の教育歴は6年以上の生徒でも無理だったか。年齢相応の母語力を保持していることが効果をあげる前提になりそうだ。

中学校の教科書をスマホのカメラ入力機械翻訳で各自が母語で読む方法を試した。生徒たちも「これならわかる」というので、母語の解答を日本語に変換して提出する方法を試してみよう。

2.3. 改善を重ね、有効な学びの見通しが立った試み：史料・資料の読み取り支援、発表支援

史/資料の読み取りから歴史を「考える」活動は、毎回改良を重ねた。①図表は日本語のままでは、何を示すものかわからない→語彙に丁寧にルビ・英語/中国語訳をつけて理解支援をする。②史料をリライト、単語訳をつけて読む→読み取り支援をする。③日本語力が不足で発表できない→日本語の発表文の形を作り、読み取った情報を穴埋めして、発表できる形にする。

そこまで手を加えると、自由な発想の発言を損なうことは承知だが、日本語力が不足で他に共通言語がない場で、①②③まで揃えて、やっとアウトプットが授業中にできるようになった。

教科書掲載の史/資料で、「取り出しクラス」でも使えそうものは少なく、「資料を読み取ろう」という活動は、1年間で4回だけだった。今後は、他社の教科書にも当たり、学びを引き出しやすい教材を探して、教材化して、取り組みの回数を増やしたい。

3. 2022年度の取り組み全体を包括的に振り返る

定時制高校には日本語ゼロの生徒が普通に入学するようになり、筆者は今年度ついに授業に通訳を頼んだ。「取り出しクラス」は教科も日本語力も同時に伸ばすことを目指してきたが、教授言語が日本語である以上、限界はある。最低限の日本語を先に学習する制度が必要になるだろう。

この状況に対し、スマホのカメラ入力機械翻訳の機能の向上に可能性が見いだせる。母語力が年齢相応にあれば、共通の文字資料を各自が母語で読み取って理解する方法は授業に取り込みやすい。だが、多様な背景の生徒たちが日本語で学び合う活動への対応策は、今後の課題である。

注)

1) 文部科学省 高等学校学習指導要領解説【地理歴史編】歴史総合 p 123

2) 外国につながる生徒のための教材を作る会 HATO 『こんにちは日本の歴史』